

無心(良寛)

短歌 何事も 移り のみゆく 世の中に

花は 昔の 春に かわらず

花は 無心にして 蝶を 招く

蝶は 無心にして 花を 尋ぬ

花 開く 時 蝶 来たり

蝶 来たる 時 花 開く

吾も 亦 人を 知らず

人も 亦 吾を 知らず

知らずして 帝則に 従う

花無心招蝶 蝶無心尋花
花開時蝶來 蝶來時花開
吾亦不知人 人亦不知吾
不知従帝則

解説 無の心を詠った詩。

語釈 ※無心|| 固定的なとらわれがなくなった状態。一切の妄念が取り払われた心。
※帝則|| 定の法則。

通釈 花には何の考えも心もないが、自然に蝶を招く。蝶もまた心はないが花を尋ね慕いよる。花開けば蝶来たり、蝶来たる時花開く。吾も人の心の内は解らないけれど、人も亦、自分の心を解るはずがない。ただ、吾は自然の恩恵を受け、一定の法則に従って生活しているだけである。